

善光寺式阿弥陀三尊像の問題点について

神谷麻理子

About problems of the Zenkoji-type Amida Triad

KAMIYA Mariko

善光寺式阿弥陀三尊像
一宗三尊
模刻
Zenkoji-type Amida Triad
Ikko-sanzon
copies of Buddha image

In the Buddha image history of Japan, a Zenkoji-type Amida Triad, which was popular from the end of the Heian period to the Kamakura period, is one of the peculiar making images. This indicates that the images were made emulating the principal icon of Amida Triad at the Zenko-ji in Nagano. Even though the principal icon was absolutely withheld from public view, it had spread nationwide, that must be thought downright strange phenomenon.

There have thus far been problem presentations about the Zenkoji-type Amida Triad, that were not only appearance of the original icon, but also origin of the iconography, classifications from existing model type of carving, the carvers, casting techniques, etc. However, these are, if anything, more focusing on individual works, and have been treated as branch in the history. Therefore, general problems of the Zenkoji-type Amida Triad as model are not likely yet defined under present circumstances.

This research aims to clarify what problems the Zenkoji-type Amida Tathagata is having. The process could be former step of studying the Zenkoji-type Amida Triad, however I would feel amply rewarded for my efforts if it encourages future positive considerations and be helpful in problems the Zenko-ji faith study taking in.

はじめに

わが国の仏像彫刻史上、特異な造像の一つに、平安時代末期から鎌倉時代にかけて流行した善光寺如来像善光寺三尊像、もしくは善光寺式阿弥陀三尊像などと呼ばれる模像群がある。これは、長野善光寺の本尊阿弥陀三尊の姿を写した像を指すが、本尊が絶対秘仏であるにもかかわらず全国的に制作が行われており、実に不思議な現象として捉えられている。

これまで、善光寺式阿弥陀三尊像について、原像の姿をはじめ、形制の淵源、現存作例の様式、制作者や鑄造技法など多くの論考が発表され、問題提起はそれなりに行われてきたが、どちらかといえば個々の作品を対象にしたものが多く、模像としての善光寺式阿弥陀三尊像の統一された問題点が、あまり定まっていないのが現状のように思われる。それは、飛鳥時代もしくは白鳳時代に遡ろう創建時から、平安時代にかけての善光寺の歴史が不明であること、根本となる原像、つまり本尊が秘仏であること、全国に広がる模像の現存作例の作風がそれぞれ異なり、系統立て及び編年が困難であること、何より名品が少なく注目度に欠けることなどが主な理由としてあげられるのではなからうか。

本稿では、善光寺式阿弥陀三尊像にどのような問題が孕んでいるのか、いまいちど整理を行い、明確化することを目的とする。研究の前段階といえようが、彫刻史上、傍流扱いとされがちなかこれらの像について、今後の積極的な考察を促すとともに、謎の多い善光寺の信仰史研究そのものが抱える課題の一助となれば幸い

と考えている。なお、善光寺式阿弥陀三尊像は、画像や版画、板碑などの作例も知られているが、本稿はあくまで彫刻を対象としていることを付言しておきたい。

一 善光寺式阿弥陀三尊の特徴

全国で恐らく数百体に上ろう善光寺式阿弥陀三尊像の特徴は、すでに多くの論考で紹介されているが、像容について改めて確認したい。無論、各像それぞれ細かな違いがあり、しかも部分が亡失し、当初の形が想像しにくいものもある。なお、材質は銅造が一般的であるが、木造や鉄造、石造など多岐にわたる。

(二) 全体的な特徴(光背・台座も含む)

- ① 三尊の背後に、大型の舟形拳身光背を伴う一光三尊形式である。
- ② 光背は、中尊の頭光中心部に八葉蓮華を、外縁に絡み合う蓮華唐草文、さらに雲焰文、七体の化仏を配する。
- ③ 三尊の像高は、中尊一尺五寸(四〇・〇)〜六〇・〇cm程度)、脇侍一尺前後(三〇・〇)〜三五・〇cm程度)と、中尊等身、脇侍三尺(広島県安国寺像は中尊一七一・一cm、脇侍一三〇・〇cm)に大別される。また、中尊が三五・〇cm以下の小像もある。
- ④ 台座は蓮華座と框座からなる、白型と呼ばれる形状である。さらに光背と三尊を載せる格狭間付の方座が付属する

場合もある。

(二) 中尊（阿弥陀如来像）の特徴

- ① 蓮華座上に立つ。
- ② 右手は屈臂して施無畏印、左手は垂下して第二、三指を伸ばし、その他の指を捻じる刀印を結ぶ。但し、捻じる指や、屈臂、垂下の状態が若干異なる例もある。
- ③ 服制は、大衣で両肩を覆う形式、右肩を偏衫で覆い、大衣を偏袒右肩とする形式、大衣で両肩を覆い、その下に偏衫を着ける三つの形式に大きく分かれる¹⁾。また、それらの内側に、さらに僧祇支を着ける例もある。
- ④ 頭髮は基本的に螺髪であるが、縄状渦巻文に表わされる例もある²⁾。

(三) 両脇侍（観音・勢至菩薩像）の特徴

- ① 中尊の左右で、蓮華座上に立つ。
- ② 胸前で両掌を上下で重ね合わせる梵篋印を結ぶ。中には宝珠が包まれているというが、殆んど省略されているようである。但し、神奈川円覚寺像には、それらしき丸い形が確認できる。
- ③ 上半身は、天衣、条帛を着け、下半身には裳と腰布を巻く。裳の上端を前面に垂らす形制が多い。
- ④ 頭部は高髻を結び、毛筋を彫る。また、四面、六面、八面といった多面形の筒型宝冠を戴くが、前面に山型の飾りを

付ける宝冠の形状も知られる。また、高野山不動院像のように、天冠台のみで、冠を戴かない例もある。

以上が模像である善光寺式阿弥陀三尊像の、外観上の主な特徴である。一方、『扶桑略記』は、秘仏本尊である善光寺如来像の伝来と姿について次のように記す³⁾。

（欽明天皇十三年条）

一云。同年壬申十月。百濟明王獻阿弥陀佛像。長一尺。五寸。觀音勢至像。長一尺。表云。臣聞。萬法之中。佛法最善。世間之道。佛法最上。天皇陛下亦應修行。故敬捧佛像經教法師。附使貢獻。宜信行者。上或記云。信濃國善光寺阿弥陀佛像。則此佛也。少治田（難古）天皇御時。壬戌四月八日。令秦巨勢大夫奉請送信乃國。云々。

以下「善光寺縁起云」と続き、百濟渡来の阿弥陀三尊像が難波津に漂着したこと、それが日本最初の仏像で「本師如来」と号し、信濃国水内郡へ移したこと、本像は釈迦在世の時、天竺月蓋長者によつて鑄写されたもので、それが善光寺三尊像であること、といった内容を引用している。

一般に普及している『善光寺縁起』は、応安、応永縁起と呼ばれる室町時代にまとめられたものであるが⁴⁾、『扶桑略記』編纂時には、少なくとも縁起の祖形が知られていたことがうかがえる。これらが『日本書紀』欽明天皇十三年条の仏教公伝の記事を做つ



図1 『覚禅鈔』巻第七「善光寺像」

ていることは、すでに周知のことであるが、『日本書紀』では請来像を「阿弥陀」ではなく「釈迦」としている点に大きな違いが見られる。恐らく『扶桑略記』の編者皇圓が、意図的に尊名を阿弥陀へ改めたと思われるが、いずれにせよ善光寺如来像が、わが国最初にもたらされた由緒ある像であることが世に知れ渡り、信仰にも拍車をかけたのであろう。残念ながら、『扶桑略記』が記す像の彫制に関する情報は、僅か法量のみである。だが、それに則り、中世の模像造立が具現化し、徐々に外見的特徴が定まってくることになる。

『扶桑略記』に続く関係史料としては、十二世紀末の『覚禅鈔』巻第七（阿弥陀下）「善光寺像」が上げられる。本図は、現存する善光寺式阿弥陀三尊像に共通する特徴を備えており（図1）、具体的な図像を示すものといえようが、秘仏本尊を写したものは到底考えられなく、当時すでに流布していた模像の一つを粉本にしたであろうことが想像できる。

二 模像造立の始まりと流行

平安時代以前の善光寺の歴史が不明であることは、すでに触れたが、少なくとも十二世紀前半から信仰は活発になってきたように、重源や覚忠といった著名人の参詣が続く。それは、本尊善光寺如来への信仰の隆盛と言いかえることができようが、この頃には、すでに秘仏化されていたらしい。このような信仰の契機となった最も決定的な出来事は、文治三年（一一八七）、源頼朝による善光寺再興で、以後鎌倉時代における善光寺信仰を大きく発展させることになる。再興の命について、『吾妻鏡』では次のように記している。

（七月）廿七日、丙寅。信濃國善光寺。去治承三年廻祿後。

有再興沙汰之間。殊可加合力之由。被仰付諸人云々。其状云。

下 信濃國庄園公領沙汰人等所

可早結縁助成善光寺造営間土木人夫事

右件寺。靈驗殊勝伽藍也。草創年舊。堂宇破壊。加之動有火災之難。礎石之外更無殘。有情之輩何不歎此事。早國中不云庄園公領。一味同心与力於勸進上人。土木之間。勵出人夫。令終其功。若不奉加此功之者。不可有所知領掌之儀之状如件。以下。

文治三年七月廿七日（以下略）

これによれば、再興以前の善光寺は堂宇が破壊され、さらに火

災（治承三年・一一七九）によって礎石以外は何も残されていないという、かなり荒果てた様子であつたらしい。そして、信濃国の公領や領主に、勸進上人に協力し、人夫を提供して善光寺造営に尽くすことを命じている。さらに、翌二十八日には、勸進僧から信濃国司の代理となる目代へ、同内容の奉書を送っている。そして建久二年（一一九二）に曼荼羅供の記事が見えることから、一応の伽藍の体裁が整つたのではないかと考えられる。さらに、再興の命を下してから七年後の建久六年（一一九五）、頼朝が参詣の意向を発表している。

一方、善光寺式阿弥陀三尊像の造立は、尾張国の僧定尊によるものが最も早い史料で、『善光寺縁起』「定尊沙門新佛治鑄并如来拝見事」に、

・建久五年（一一九四）閏四月六日、尾張国定尊は一千部の念仏読経を終え、善光寺如来像の使者を夢で見る。その後、善光寺へ参詣し、三ヶ月参籠する。

・同年十月十五日、夢で如来を拝見し、「慈尊出世不遠。三會暁有近。其間沈生死海。日本國衆生皆不墮三途欲利益。汝速勸進一切衆生治鑄我形像於等身云々。」と、託宣を受ける。

・翌建久六年（一一九五）四月二十一日、如来が燈明法師の夢枕に立ち、定尊に拝されたいと告げたため、同月二十八日、定尊に拝ませることにした。その時三軀の印相は尋常でなかったとする。

・その姿を写した定尊は、その後四万八千七百余名より勸進し、

同年五月十五日に中尊を、六月二十八日・二十九日に三尺の観音・勢至菩薩像を治鑄した。

といった内容が記されている⁷⁾。

ところで、山梨善光寺像は光背が失われているものの、三尊が揃つた秀作で、中尊一四七・二cm、両脇侍ともに九五cm前後の、いわゆる等身像及び三尺像として知られる。左脇侍の右足ホゾには「建久六年^{卯乙}」、さらには左肩矧ぎ面に発願者名らしき「蓮阿」の字が刻まれ、基準作例としても重要視される。本像は永祿年間（一五五八〜六九）武田信玄によって甲州へ遷されたとき法量と紀年銘から、定尊造立仏との見方も強く、今後さらに検討すべき作品である。

定尊に続き模倣造立を行ったのが浄蓮上人源延で、やはり『善光寺縁起』の「浄蓮上人源延如来奉拝見事」に次の内容が記載される。

・伊豆国の源延は、毎年二度三度善光寺如来を参詣に訪れていた。

・承久三年（一一二二）二月二十二日、二十四日、夢で如来に拝する。

・善光寺の僧が、源延に拝されたいと如来の示現を受けたため、同年三月二日、源延に拝ませることにした。

・源延が拝した如来像は「如来御色如濃紫色。御長一尺五寸計。右御手施無畏印。肩奇特之御指末微屈給。左御手如刀印。大指

無名指相去二分計持之。二菩薩同住寶冠。般若梵篋印也。」であつたという。源延はこの姿を絵に描いた。

・後に、絵像を手本に木彫像を造立（仏師は越前法橋海繩）、冶鑄し、同年五月十五日に完成させた。

と、定尊が拝した善光寺如来像よりも、はるかに詳細な像容を記している。しかし、定尊が夢告によつて造立した像は等身像、源延が拝した像は「扶桑略記」が記すよう一尺五寸であるという。恐らく、この頃すでに造立が広まっていた、通形の銅造善光寺式阿弥陀三尊像の姿をそのまま記したのであろう。源延は伊豆走湯山の重要人物で、源頼朝と妻政子と深い結びつきがあり、善光寺信仰の普及に努めた勸進聖であつたらしい¹⁰。いづれにせよ、このような説話の成立も後押しし、模造の流行は各地に広まり、十三世紀前半には、都でも盛行ぶりを見せる¹¹。

さらに、大僧都良訓による『古今一陽集』（西之部）には「善光寺如来模像」造立に関して、

金玉抄第一曰、或人曰、西明寺殿、私云、宗尊親王執權、平時頼、後醍醐明寺、弘長三癸亥年、善光寺如来直拜度由有仰、彼寺別當云、直御拜有、御命可失由申也、而西明寺仰、設有漏依身盡、無漏佛體永不可朽、其特別當御厨子渡申、西明寺殿直御戸開、如来探給、人膚様温御座、其時如来寸尺取、六十六體鑄立、六十六箇國御安置云々。

という、北条時頼（最明寺殿）が六十六体の模像を造立して

六十六ヶ所に安置した記事が見える¹²。これについて、服部清道氏は源延の模像造立と併せて考えるべきであると指摘し「之は源延傳説と、『太平記』の『時政参籠擾島事』の條に記されてゐる、北条四郎時政の六十六部の信仰傳説とを混合して時頼に附會せしめたやうに思はれる。」とする¹³。

時頼は、建長寺建立や晩年の出家など仏教への信仰が篤かつたことで知られるが、同時に、不断経衆、不断念仏衆の料を善光寺に寄進するなど、善光寺に対する信仰心もうかがうことができる¹⁴。『古今一陽集』の成立は江戸時代であり、六十六体の模像造立の信憑性については後考が俟たれるが、少なくとも模像造立の隆盛を知る記事として注目されるといえよう。

では、現存する善光寺式阿弥陀三尊像はどうであろうか。善光寺式阿弥陀三尊は、比較的銘文を刻むものが多く、特に十三世紀半ば以降、継続的に制作されていった。建久六年（一一九五）の、現存最古の紀年銘を持つのが、前掲の山梨善光寺像で、通例の善光寺式阿弥陀三尊像の中では異例な等身大であること、他に類例を見ない独特の作風を持つことで注目される。一方、同じく十二世紀末、鎌倉初期の制作と思われる滋賀善水寺像や島根善光寺像などは、大きさはもとより、山梨善光寺像とは全く異なった作風を見せている。このように、同時代（特に初期）でも各像それぞれが個性的で、共通点があまり見られないことに対し、ドナルド・F・マツカラム氏は「このような特異性と多様性が見られるということは、模造の伝統の初期の段階において、基準となる形式の定型がまだ成立していなかったのではないかと推察できる。」



図2 善光寺如来像（善光寺式阿弥陀三尊像）、重文、東京国立博物館所蔵

©Image : TNM Image Archives Source : <http://TnmArchives.jp/>

と解釈する¹⁵。前述したように、『覚禅鈔』以前は、善光寺式阿弥陀三尊像の図像は混乱しており、成立後は徐々に共通理解が持たれるようになったと思われる。

その後の形式化された像、言い換えれば善光寺式阿弥陀三尊像の典型として先ず上げられるのは、東京国立博物館像であろう(図2)。像の一部に後補はあるものの、全体的に保存状態も良く、丁寧な造りである。しかも、建長六年(一二五四)正月二十日、下野国那須で造立されたこと、二十七歳の勸進上人西忍が夢告によって鑄模したこと、といった詳しい造像背景が刻まれている点からも、貴重な資料である。

三 善光寺式阿弥陀如来像に関する諸先学と問題点

善光寺式阿弥陀三尊像の研究の難点について、ドナルド・F・マッカラム氏は、「模像が広く全国に分布していること、又これらの像がどのように伝播したかを記録した文献が少ないこと、更に鎌倉時代後半から一三三〇年にかけての模造の流行がどのような様式展開をとげたかという課題の系統だった調査もないことなどである。このような研究は今後特に必要なものの一つであろう。」と述べている¹⁶。善光寺式阿弥陀三尊像が、清涼寺式釈迦如来像とともに、鎌倉彫刻において模像という特殊な様相を示しているにも関わらず、あまりに範囲が広く、しかも煩雑であることから、踏み込んだ研究がされてこなかった。像の名称一つとつても、「善光寺式阿弥陀三尊像」といえば鎌倉時代以降流行した模像群を、「善光寺如来像」といえば秘仏本尊を指す、という区別がもっと厳密にされるべきであろうが、半ば混同して扱われてきたことも、その表れといえよう。秘仏本尊の姿の推察し、さらにはその特異な形制の源流を辿るため、模像群からアプローチする方法は止むを得ないと言えようが、両者は造立背景が異なる全く別の像であり、あくまで分けて考えるべきであることを、改めて認識すべきである。

以上を踏まえ、諸先学において、秘仏本尊と善光寺式阿弥陀三尊像の何を問題点としているのか、列挙してみたい。

(一) 秘仏本尊「善光寺如来像」に関する問題の所在

そもそも実見不可能な秘仏本尊について、彫刻史としての研究が果たして可能かどうか問われるところであろうが、すでに多方向から幾つかの問題が提起がされている。

① 像の存在について

飛鳥時代、百濟より伝来したという秘仏本尊は本当に存在するのかどうか、という善光寺信仰史の根幹に関わる問題で、かなり早くから取り上げられてきている¹⁷。また、『実隆公記』発行の『善光寺史研究』からもうかがえる¹⁷。また、『実隆公記』永正五年（一五〇八）五月十一日条の「信州沙門戒順謹言上」の記事にも、その存在に疑問を投げかける次の記事が見られ、解釈が大きく分かれる。

（永正五年五月十一日）

信州沙門戒順謹言上

右根本善光寺前立新佛者、弘聖菩薩依如来靈告被造立之、其故者、過一千年後本尊可被移化縁於夷嶋、其後為衆生濟度可留形像云々、自爾已來威光不異本佛、利益宛同生身、然而去文明九年六月廿四日本堂炎上之時、斯佛焼失訖、然而七日之後自灰中立瑞雲、放光明之間、諸人成奇特思、尋求之処、此佛黄金御首灰中留給、爰戒順發無二大願、如元可奉鑄統之由蒙靈夢之間、測所願成否、於天王寺一七日令參籠祈精申之処、於堺北庄致勸進可奉造立之由、重蒙其瑞夢之間於彼在所

新調之、文龜貳年卯月八日遂其節訖、（以下略）

（文明九年を火災としているが、文明六年の誤りと思われる）

善光寺「前立新仏」は弘聖菩薩によって造立されたものであるが、文明九年（一四七七）六月二十四日に火災で焼失、七日後、灰の中から御首が見つかった。戒順は靈夢によって堺北庄にて仏を新調、文龜二年（一五〇二）に完成した——という内容である。

三国伝来の秘仏本尊は失われている、とする奥野高廣氏は、この時の火災によって脇侍二尊像を含む本尊が焼失し、戒順が前立を新鑄したと見る¹⁸。牛山佳幸氏も「前立新仏」とは本尊秘仏を指し、仏頭のみを残して失われたと考える¹⁹。

また、江口正尊氏は、さらに早い、治承三年（一一七九）、堂宇とともに本尊も焼失したとし、その前立本尊として造立されたのが定尊造立の三尊像であると²⁰。

一方、小林敏男氏は「戒順は如来の靈夢をうけて、その前立新仏の再興にのりだすことになった」ということで、秘仏である善光寺三尊の本仏の焼失をのべたものではないだろう。」とした²¹。

「信州沙門戒順謹言上」の記事で重要なことは「前立新仏」の解釈であろう。秘仏本尊を指すのか、それとも、いわゆる「前立」を指すのか。中世以降、善光寺では幾度か火災に見舞われており²²、秘仏とされる創建期からの本尊が焼失した可能性は十分に考えられる。また、失われたことにより模像造立が流行したという理由も考えられなくもない。

② 像の伝来について

善光寺史の根本史料『善光寺縁起』によれば、秘仏本尊は釈迦在世中、天竺で造られ、百済より献上された、わが国最初の仏像ということになっているが、その信憑性については殆んどの研究者が疑っており、寺の草創事情も含めて史料の検討が繰り返されてきた。

だが、現存する後世の模像群の形制から想像しても、秘仏本尊が飛鳥時代に大陸からもたらされた可能性は大いにあり得ることと考える。

古代、信濃は渡来系氏族による文化が形成された地で²³、秘仏本尊である善光寺如来像を安置した本田善光なる人物も、そのような渡来人であったとする見解もある。境内から白鳳時代の瓦が出土したことも報告されており、創建年代はかなり遡ることも予想されよう。秘仏本尊の伝来そのものを解明することは、現段階では非常に困難であるが、造立に渡来人が深く関与したということとは言えるのではなからうか。

③ 尊名について

善光寺如来像に関する最も早い論考を発表した小林剛氏が指摘している問題点である。小林氏は「中尊の形相には彌陀としての何等明徴もない。」とするが、河内観心寺の観音菩薩立像を例に、結局は、脇侍像は観音・勢至であり中尊像は阿弥陀如来と推定してよい、と述べられた²⁴。だが、一方で、さらに考察を深め、阿弥陀如来像であることを否定する意見もある。

石田茂作氏は『善光寺縁起』と『日本書紀』に見える欽明天皇十三年、百濟聖明王によつて献上された像の尊名の違いに着目し、飛鳥時代における阿弥陀信仰や形制、尊名変更の背景を提示した上で、善光寺如来像は、本来は釈迦であったとした²⁵。だが、この問題について、実見が許されないかぎり結論が出るものでなく、解明できない問題提起と言わざるを得ない。従つて現在のところ、善光寺如来は、やはり阿弥陀であることを前提に考察を進めるほうが穏当と言えよう。

④ 形制の祖形について

これまでに一光三尊、中尊の結ぶ刀印、両脇侍が結ぶ梵篋印といった、主に三つの観点から善光寺式阿弥陀三尊像形制の淵源を探索の考察が発表されている。

一光三尊形式は五世 紀中頃の大陵、北魏、及び南齊で成立したらしい。中尊の刀印は、南朝永明元年（四八三）銘石造無量寿仏が最初の例で、続いて六世紀初め、北魏龍門石窟賓陽中洞の仏坐像（但し一本指の刀印）に表れる。そして、それらがわが国飛鳥時代の止利派の仏像へ受け継がれていったという²⁶。好例としては、法隆寺献納宝物の四十八体仏一四三号像が、このような特徴を備え、善光寺如来、すなわち秘仏本尊の姿を彷彿とさせる作例としてよく知られている。

一方、秘仏本尊が百済からの請来仏であることも鑑み、朝鮮半島に源流を辿る大西修也氏による考察も発表されている。氏は両脇侍の梵篋印に着目し、百済で流布した『請觀世音菩薩消伏毒害

陀羅尼呪経』（『請観音経』）が一光三尊仏、そして善光寺如来像の成立に大きく関わったことを指摘している²⁷。

他にも、両脇侍の戴く多面式の簡型宝冠の源流など、祖形に関わる問題は少なくない。

（二）善光寺式阿弥陀三尊像に関する問題の所在

① 模像造立の起源と伝播について

像造立の起源については、具体的に模造が行われる直前の、善光寺信仰の隆盛を考えなければならぬ。西川新次氏は、善光寺如来は十二世紀前半にはすでに叡山や畿内に聞こえていたことを指摘するが、信仰については「始めから貴顕と結びついたものではなく、稀有の古仏に対する在地の人々の信仰が、仏教伝来の所伝と結びついて寺の発展を促し、さらに勧進聖の活躍によって郷から郷へと伝えられ、豪族や武士に支えられながら、その勢力を拡げて行つたと考えられるとすれば、治承三年（一一七九）同寺炎上後の頼朝の助成も、このような善光寺信仰のあり方を踏まえてのことであつたと想像される。」とし、その特異な表現について「一面では現実には押し得ぬ本師像に学ぼうとした古典思慕の結果ともいえるが、他面では往々にして勧進聖あるいは願主と地方鋳物師との直結によるとも想像される半素人的造像環境によるところがあるのかも知れない。」とする²⁸。

中央では、権力者による第一級の造寺・造仏が盛んに行われる一方で、地方豪族や民衆の中では、善光寺式阿弥陀三尊像の造立が進められていったようである。人々を模像造立に駆り立てた背

景には、諸先学が指摘するよう勧進聖による熱烈な布教活動が想像されるが、十二世紀末から十三世紀にかけて、これらの信仰が爆発的に受け入れられた明確な理由は未だ出ていないと言える。

② 制作者および制作場所について

個別の作品については、銘文によって発願者、もしくは制作者名が明らかにされているものも少なくない。鎌倉初期の代表作例として知られる滋賀善水寺像と東京個人像は、形状及び作風が非常によく似ており、刻まれた銘文の内容も年号（元久三年・一二〇六）も同じである。ただ、鋳物師の名のみ異なっている点に疑問が残るが、同一作者による可能性が強い。全国的な善光寺式阿弥陀三尊像の調査が進めば、このような作例の存在が、より明らかになるであろう。

その先駆けともなった論考を発表されたのがドナルド・F・マッカラム氏で、現存する善光寺式阿弥陀三尊像の分類を試み、特に着衣形式から、ある一群が善光寺門前町の専門工房で制作された可能性を指摘した。その代表作例が、善光寺式阿弥陀三尊像の中でも、特に優れた作品として名高い高野山不動院像で、同形式の像が山形県内に数体と栃木県内に存在していることを報告している²⁹。

③ 模像の技法について

技法について、積極的な考察は決して多くはないが、像ごとに

調査報告が発表されている。

善光寺式阿弥陀三尊像の材質は銅造が主であることから、論じられるのは鑄造技法が中心である。平安時代後期以降、鑄造仏は本体と台座など分鑄する例が見られるようになるが、鎌倉時代以降さらに発展し、神奈川川覚寺像のように、像(中尊)を八つに分鑄し寄せ合わせるといった、複雑な構造を持つ像も出てきた³⁰。

また、鎌倉時代鑄造仏の原型は木型が多いと指摘されてきたが、どのような原型を以って善光寺式阿弥陀三尊像が鑄造されたか、定まった条件があるわけではなく、各像様々であったと思われる。だが、源延の模像造立の記事は、まさに木型原型を用いていたことを証明すると言え、さらに善光寺式阿弥陀三尊像にも、鑄造仏と、その原型に使われたと思われる木彫仏がともに現存するとの興味深い報告がある³¹。なお、山梨善光寺像は土型が用いられたらしく³²、そうなるかと蠟型を用いた例も、当然あったものと考えられよう。

全国に広がる善光寺式阿弥陀三尊像の実査は困難なことであるが、技法面からのアプローチは、今後の研究に大きな発展を促すとともに、木型原型となった木彫像が新発見されるならば、善光寺式阿弥陀三尊像のみならず、彫刻史における鑄造技法の問題を解いてくれると言えよう。

④ 模像の寸法について

『扶桑略記』には、中尊を一尺五寸、脇侍を一尺と記載する。だが、最初の模像造立、つまり定尊像は等身大で、さらに甲府善光

寺像も同大である。

他にも、鎌倉時代に遡ると思われる等身大以上の像は、例えば広島安国寺像(一七一・一〇) や宮城高清水善光寺像(一五四・三〇) 、やや小ぶりであるが、三重龍興寺(光勝寺)像(一二七・三〇) などが知られる。勸進聖が背負い、信仰普及のため全国を行脚したならば、ポータブルサイズ、つまり中尊一尺五寸像、もしくはそれ以下が適しているはずである。等身像の制作には、恐らく特別な背景があったと思われるが、その理由については未だ明確ではない³³。

おわりに

以上、彫刻史における善光寺式阿弥陀三尊像の、共通した問題の所在を提示してみた。但し、このような問題点も、決して単独のものではなく、互いに絡みあっていることが、改めて認識される。今後の研究方法としては、地方ごと丹念に作例を洗い出し、それらの造立背景も含めながら、比較検討していく必要がある。それは、非常に地道な作業であるが、謎の多いこれらの模像群の全貌をつかむには、意義のあることと考える。

また、十三世紀前半の四十二年間(一二〇七〜四八)、紀年銘を持つ善光寺式阿弥陀三尊像が知られていない。頼朝の再興後、当然善光寺の寺運は上昇したであろうし、承久三年(一二二二)の、源延の模像造立を考えると、盛んに制作されても決して不思議ではない。このような空白期間もまた、善光寺式阿弥陀三尊像が抱

える謎の一つである。

注

- 1 熊沢紀子「善光寺式阿弥陀三尊像について——その形式分類と東博所蔵の模刻像——」『美術史研究』二二、早稲田大学美術史学会、一九八四年。
- 2 鎌倉時代初期の作例では、滋賀善水寺像、東京個人蔵像などが知られる。また、年代が降る作例が多いが、真宗高田派寺院に伝わる像も、螺髪でなく縄状渦卷文で表されている。こういった渦卷文は、同時代に模造が流行した清涼寺釈迦如来像の影響であるとの考えもある。
- 3 『扶桑略記』第三、欽明天皇十三年十月条。
- 4 『統群書類従』二八釈家部、『大日本佛教全書』寺誌叢書第四。
- 5 『吾妻鏡』第七、七月二十七日条。
- 6 『吾妻鏡』第十五、八月二日条に「二日甲寅。放生會以後。可有御参信濃國善光寺。被仰下云々。」と見える。だが同月二十三日には、来春に参詣を延期する旨が伝えられている。そして『吾妻鏡』には見えないが、「相良家文書」の「右大臣善光寺御参随兵日記」から、建久八年（一一九八）、頼朝が漸く参詣したとの解釈がある。小林計一郎「善光寺史研究」『史料編』、信濃毎日新聞社、二〇〇〇年。
- 7 『本朝高僧伝』巻六八にも同様の、定尊冶鑄の記載がある。
- 8 本像については実査された倉田文作氏の論考が詳しい。「甲州善光寺の弥陀三尊像について」『信濃』一六（三）、「善光寺如来考」『國華』八六六、ともに一九六四年。
- 9 『本朝高僧伝』巻五三にも同様の、源延模像造立の記載がある。
- 10 前掲注6、小林計一郎「善光寺史研究」第一章「善光寺略史」／三「鎌倉時代の信仰のはじまり」。
- 11 『明月記』嘉禎元年（一一三五）閏六月十九日条。
（嘉禎元年）六月十九日、庚戌、終夜雨降、朝天陰。禪尼数輩乘車禮、近日可聞三尊像、近日京中道俗騷動禮拜云々、奉写善光寺仏。
12 『古今一陽集』西之部／大経蔵条。
- 13 服部清道「鎌倉に於る善光寺如来の信仰(三)」『神奈川文化』二一—二、神奈川文化研究会、一九四一年。なお、本記事が源延の模像造立に関係することは、小林剛氏によって早くから指摘されているが「何等正確な文献の記載がないのであるから、定尊像と同様に傳説としての價值しか認められないわけである。」としている（『善光寺如来像の研究』『佛教美術』一八、一九三二年）。
- 14 『吾妻鏡』第五一、弘長三年（一一六三）三月十七日条。
（弘長三年）三月十七日、丁酉、最明寺禪室買得信濃國深田郷給、今日寄付善光寺、所被充置不断経衆・不断念仏等粮料也。偏思食来世值遇云々、（以下略）
- 15 ドナルド・F・マッカラム「東京国立博物館保管善光寺式阿弥陀三尊像について」『ミュージアム』四四—一、一九八七年。
- 16 ドナルド・F・マッカラム「山形県内の善光寺式阿弥陀三尊の一系統——高野山不動院像との関係について——」『羽陽文化』一一三、一九八六年。
- 17 『秘佛に就て』『善光寺史研究』善光寺史研究会、公友新報社、一九三二年。
- 18 奥野高廣「信濃善光寺如来仏——王法と仏法——」『日本歴史』四五二、一九八六年。
- 19 牛山佳幸「乱世における信濃善光寺と善光寺信仰」『蓮如上人研究』思文閣出版、一九九八年。
- 20 江口正尊「善光寺仏試考」『東日本学國大学教養部論集』一一、一九八五年。
- 21 小林敏男「善光寺草創事情——研究史概観——」『大東文化大学紀要』三七、一九九九年。
- 22 善光寺の火災は次のとおり。（現本堂の完成、宝永四年・一七〇七まで）
治承三年（一一七九）三月二十四日（善光寺縁起）第四「御回祿之次第」によれば、金堂、四面回廊等が全焼、但し如来像は取り出されたらしい）

文永五年（一一六八）三月十四日

- 正和二年(一三三三)三月二十二日
 応安二年(一三七〇)七月四日
 応永三十二年(一四二五)?
 応永三十四年(一四二七)三月六日
 文明六年(一四七四)六月四日
 慶長二十年(一六一五)三月三十日
 寛永十九年(一六四二)五月九日
 元禄十三年(一七〇〇)七月二十一日
 宝永二年(一七〇五)五月一日
- また、治承三年以前にも火災に見舞われていたことが伝えられる。
- (前掲注6、小林計一郎『善光寺史研究』第二章 善光寺の造営/一度重なる火災と復興)参照
- 23 久野健「日本海よりの渡来文化」『仏像風土記』日本放送出版会、一九七九年。
- 24 前掲注13、小林剛「善光寺如来像の研究」。
- 25 石田茂作「善光寺如来は阿弥陀仏に非ず」『志茂樹博士喜寿記念論集』、志茂樹先生喜寿記念会編、一九七一年。
- 26 黒坂周平「善光寺草創考―試論―」『信濃の歴史と文化の研究(二) 黒坂周平先生論文集』黒坂周平先生の喜寿を祝う会編、一九九〇年。及び「善光寺如来の源流」『善光寺―心とかたち―』第一法規出版、一九九一年。
- 27 大西修也「第二章 善光寺式阿弥陀三尊の起源と展開」『日韓古代彫刻史論』中国書店、二〇〇七年。
- 28 西川新次・関根俊一「善光寺三尊の形式を巡って―千葉県下の遺品を中心に―」『三浦古文化』三三、一九八二年。
- 29 前掲注16、ドナルド・F・マッカラム「山形県内の善光寺式阿弥陀三尊の一系統―高野山不動院像との関係について―」。
- 後に小林計一郎氏が新たに長野県内の像を追加、五体の作例を紹介し、これを「善光寺門前式」と命名された(「善光寺門前式阿弥陀三尊」『長野』二〇七、一九九九年)。
- 30 このような特殊な鑄造技法が用いられた理由として、田辺三郎助氏が「木彫でできることは鑄銅でもできるといふ、技術の誇示」(鎌倉時代の金銅仏)『三浦古文化』九、一九七一年)とする一方、野瀬文字氏は善光寺如来像が生身の弥陀と称され尊崇されていたことに着目し、「円覚寺像の肉身部は、生身の弥陀の肉身を製作するという特別の意識の下に、言いかえるならば、強い信仰に裏付けられて鑄造されたことが想像される。」とする(「善光寺式阿弥陀像について」『鎌倉』三二、一九七九年)。
- 31 奥健夫「鎌倉時代金銅仏の鑄造技法に関する調査研究」『鹿島美術研究 年報』二二、二〇〇五年。
- 32 前掲注8、倉田文作「甲州善光寺の弥陀三尊像について」、『善光寺如来考』。
- 33 たなかしげひさ「信濃善光寺如来原像の銅造等身説」『佛教藝術』八二、一九七一年。氏は、秘仏本尊も等身大であることを主張されている。
- 〔付記〕
 本稿脱稿後、「佛教藝術」三〇七(二〇〇九年十一月)で「善光寺如来」の特集号が発行された。さまざまな観点から善光寺如来像が考察されており、参考となる見解も多かった。今後、善光寺如来像がさらに脚光を浴び、研究の発展が大いに期待できる。